

## 巻頭エッセイ

### エリユトラ海のほとりで

小堀 巖

戦後まだ書物の出版が困難な時期、村川堅太郎先生の訳された『エリユトラ海案内記』の出版は、旱天に慈雨を得たような思い出がある。学者としての研鑽のあとは訳註にも見え、何時か現場をふんでみたいと思った。その後私は、カナートの比較研究を中心に、ひろく中東・北アフリカを歩く機会が多かったが、エリユトラ海域に足をふみ入れたのは、1970年の終わり、サウジアラビアのアシール地区の海港ジザンを訪れた時であった。まるでアフリカの村を思わせる円錐型の住居も遺っており、人々の服装や帽子にも、アフリカに居るのかと眼を疑った。その折、私達の仕事の助手を務めたのはソマリア人で、出稼ぎに紅海の対岸から来ていたのである。

60年代の後半、ダマスカスの中心部の一画に、エリトリア解放戦線の事務所があった。好奇心も手伝って所長に面会を求めると気持ちよくあってくれ、熱っぽくエチオピアとの戦いについて話してくれ、日本の国民との連帯を求められた。その後、エチオピア航空は攻撃の対象になる恐れがあるからと、親切な搭乗自粛の手紙がきたこともある。

92年の初頭、私は、世界青年の船「にっぽん丸」の責任者として、約200人の外国人、100人の日本人の若者ととともに、紅海に入り、スエズ運河をわたった。真夜中にメッカの西を通過するので、モスレムの若者達が集まり礼拝を行っていた。バルセロナ迄旅しての帰り途、冬の地中海は大荒れになり、スエズ運河をわたりきった頃には、船長も過労で倒れるほどであった。往復の間、東側には、はるかにシナイの山々を望めたが、アフリカ大陸は遠く、詳しい海図を見ながら、想像をたくましくするしかなかった。私がエ

チオピアに入ったのは、68年、まだ皇帝が健在でそれなりの秩序のある国に思えた。その折、一番印象的であったのは、イスラエル博覧会をやっていたことである。シェバの女王とソロモン王の故事を描いた羊皮にかかれた泥絵とともに、数千年もまえからの紅海をこえた交流を説きながら、じっくりと足を据えたい新しい国と、古いキリスト教国との対比は実に妙なものであった。その後、メンギスツ政権が興り、迫害を逃れた農学の専門家と、インドの国際農業研究機関で何年か親しくする機会があったが、貴族の出ということで、ノーブルな顔だちが今も強く印象にのこる。

最近、1930年代に自動車で、チュニジアからリビアに入り、カイロまで目指したデンマークの探検家の旅行記（英訳）を読む機会があった。その折のリビアの記述で、イタリア軍が、アラブ兵は使いにくいので、エリトリア地方からの傭兵を使っていたことを知った。今は、独立を獲得したエリトリアの人々にも、このようにつらい過去があったのである。

私達日本人は、エリユトラ海の周辺についてあまりにも知識が少ないが、歴史の糸は、あちらこちらでほつれあっている。ナイル川の水利用をめぐるエジプト、スーダン、エチオピアの論争などを見ると、ナイル・エチオピア学会の扱う地域というものは、少しづつ切り離しては全体像がつかめまい。コーランにある象の年の記述のように、かつては、アフリカの象が、アラビア半島の端にきたこともあるのであろう。近未来的にながめると、紅海の汚染の問題もそのうちに重要な命題になるであろうし、ソマリアなどにみる民族問題の将来も、私達は無関心ではいられない。ユニークな学会の進路を問われる所以である。

(こぼり いわお 明治大学)